



—世界に飛び出した「秋田人」—

## 反戦平和を求めて 小牧近江

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

小牧近江(本名：近江谷嗣、1894～1978)は、秋田県南秋田郡土崎港町の豪商、近江谷栄次の長男として生まれた。小牧は地元の土崎小学校で6年間学び、同級生には、生涯の盟友になった劇作家の金子洋文、作家の今野賢三がいた。

小牧は、小学校を卒業後、明治37年国会議員に当選した父栄次に従い東京の暁星中学校に進学した。栄次は教育熱心で、小牧と前後して親戚、眷属の子11名も上京させ、暁星の小、中学校に進学させた。その中には、後に小牧とともに行動して、秋田県の「農民の父と母」といわれた叔父の近江谷友治、従弟の畠山松治郎もいた。暁星は、パリの修道会マリア会の経営で、外国語はフランス語であった。小牧より少し遅れてパリに留学した藤田嗣治も暁星の夜間部でフランス語を学んでいる。

明治43年、小牧の父近江谷栄次は、ベルギーのブリュッセルでの第16回列国議会同盟会議に尾崎行雄たちと出席することになり、長男小牧を外交官に仕立てようと同行させた。栄次は会議終了後、小牧をフランスに伴い、パリの名門アンリー四世校に寮生として入学させ、送金を約束して帰国してしまう。

いくら明治といえ、夏目漱石がイギリスに、森鷗外がドイツに留学した例がないわけではな

い。しかし彼らは官費留学で、漱石がロンドンに留学したのは、東京大学を卒業し、松山中学校、第五高等学校の教師を経験した34歳の時である。鷗外も22歳とはいえ、東大の医学部を卒業していた。二人とも人生の方向はすでに決定していた。

一方の小牧は、16歳の少年で、何の目的で何を学ぼうとしていたのであろうか。彼のアンリー四世校時代の記念写真が残っているが、それは未熟なフランス語を学ぶために、小学部の8、9歳クラスで学んだ時のものである。小牧は、自らの意志でフランス留学したのではなく、父に連れ出されたのである。小牧は、暁星中学時代、フランス語が得意であったが、見るもの聞くもの新しく、苦勞したであろう。しかし、遠いアジアの地からやって来た少年にパリの人々は優しくかった。

寮生は、日曜日と授業のない木曜日の午後は、外出が許可されていたが、小牧には行く先がない。2年目の晩秋の日曜日、一人寮にいた小牧に面会人があった。9歳のクラスメート、ピエールとその父であった。ピエールの父は、裁判官という要職にあったが、小牧を寮の玄関先に待たせておいた馬車で丁寧に自宅へ案内した。

ピエールの家は、パリの名園リュクサンブー

ル公園に近いサン・ジェルマン大通りの豪邸であった。一家はサン・プリ家という南フランス出身の貴族で、南仏ドローーム県に先祖代々の城を持っていたが、当時はパリで暮らしていた。父はセーヌ州裁判長次席で、母は元フランス大統領のエミル・ルーベの娘という名門であった。子どもはピエールと兄ジャンの二人。

小牧は、休日になるとよくサン・プリ家に招待されて、元大統領のエミル・ルーベと食卓をともにすることさえあった。一家と親しくなるにつれて、小牧は歳の近い2歳年下のジャンから、その時代の思想を学んだ。ジャンは、すでにソルボンヌ大学哲学科に在学しており、反戦運動家でスイス、ジュネーブに発行元のある反戦雑誌『ドマン』の執筆者でもあった。小牧は、ジャンから、ロマン・ロラン、トルストイまで執筆している『ドマン』を紹介されて、反戦平和への思想に目覚めて行った。

パリの小牧は、フランス語が上達し、親しい人もでき、幸せな留學生活が始まったかに見えたが、日本では、思わぬことが起こっていた。近江谷栄次が、明治45年5月の国会議員選挙に落選した。手がけていた事業も持ち前の豪胆な性格が禍してか、放漫な経営に陥り経済破綻を引き起こした。当然小牧への送金はストップされ、明治45年小牧は、授業料、寮費滞納で、アンリー四世校を放校になった。舎監の先生も帰国を勧めた。小牧は、親しくしているサン・プリ家に相談に行くことも考えたが、そうすれば、月謝一人分ぐらい出してあげると言われそうであった。他人から施しを受けるのはいやだからそれを断れば、当然帰国を勧められるだろう。それなら帰国するかといえば、それには心が動かなかった。落選し家運傾いた実家に帰って何

ができるというのだろう。厄介者が一人増えるだけではないか。それにパリには学ぶべきことがまだまだある。サン・プリ家の誰にも相談せず、身を隠すように、職と住居を捜した。セーヌ河の橋を渡った繊維工場や問屋が並ぶフェドー街で、織物問屋の店員の仕事を得た。月給60フランの仕事と月の家賃18フランのマンサルド（屋根裏部屋）を確保した。大金持ちの息子で、エリート校の寮生活をしていた彼には不満足であったが、当時のパリの労働者では平均的生活である。しかし、労働など何一つしたことがない彼には身に応えた。でも、彼にはこれしか方法がなかった。そして、ここで初めて働く人々の苦しみが理解できた。以後、彼は、パリの工場や日本大使館で働きながら、大正4年国立パリ大学法学部に入学、大正7年同校を卒業する。

ところが、この学生時代、ヨーロッパ全土が、第一次世界大戦に巻き込まれた。麦やジャガイモ畑は戦場になり、食糧不足から物価は高騰した。大学の友人の若い命が戦場に散った。そして、なにより科学が進歩したこの戦争は、これまでの戦と違い、遠距離からの大砲でビルが吹っ飛ばされ、飛行機から住宅街に爆弾が投下され、街は丸焼けになった。これでは人類は壊滅してしまう。ドイツは毒ガスまで使用した。

日本大使館は、フランス在住の日本人に強く帰国を促したが、小牧近江と藤田嗣治は帰国を拒んだ。彼らには、まだまだ命を懸けても学ぶことがあった。小牧近江は、ヨーロッパの戦争を自身で体験し、それをもとに反戦平和雑誌『種蒔く人』を大正10年2月に土崎港町から創刊した。そして藤田嗣治も戦争体験を彼の戦争画として結実させている。